



鑄重

日本蘇州記

冬



日本歳時記卷之六

冬

淨書律曆志云冬之時多雨雪地終乾土人少雨
惟小冬と云歟。○氣終よ冬と云々と作せしひひも
こゝろなり天氣をむしてひひ
ゆなりひとくお通す



素問の云く冬三月これと用施しん水氷を地拆を
湯沃授ひ事あるれども砂塵起り多き日老と
信志として飲することく匿ることく私を雨は
ひく己まぬらるる所はく〜〜〜〜〜
濕つべき皮膚と泄す事めく氣を〜〜〜
西登りむらるるれは冬を掌其處のふゝり
其處の道を〜〜〜〜〜

とありはまのりかきめり

平金方ひらかねのいよく冬を天保丸てんぽうまる血気けつぎ伏ふく病びょうあり人
毛け又また勞ろう成なりあり一ひと汗あせとわ湯ゆ言こととあせあせ池いけのうす

月令げいれい廣ひろ義ぎよいよく冬ふゆ衣え下した火ひやき衣え履ぞうりとわさめり
事こと只ただか暖ぬくやありしとさし一ひと大おほに熱あつたれりありす

臥疾ふしやく瘡かさ瘍よう熱ねつ病びょうとさきよ

妻つま古ふる書かきよいよく冬ふゆ火ひ中ちゆうやきあめり暖ぬくあり六む別べつ
履ぞうり欠かく久ひさしとやめられ血ちと擦すす

金かね度た要よう略りやくよいよく冬ふゆ衣え下した火ひ足あしと伸のびくあせりあせり足あし暖ぬくあり
又また雪ゆき及およ七しち載ざいにによく冬ふゆの衣え被ひくとさし一ひと如ごとく一ひと大おほに

暖ぬくなり六む睡すい急きゆうあり時とき目めとんり氣きと吐はくろ六む條じょう毒どく

とあせも病びょうあり一ひと冷ひや抽ちゆう鉄てつ石いしと枕まくらとすりるるかき
人ひとををして眼まなこ勝かちくしむ

月令げいれい廣ひろ義ぎよいよく冬ふゆ月つきの美うつくし門かどと出でり時ときを必かならず盃はらい酒さけ

と飲のく冬ふゆ和なごとあせく一ひと或ある毒どく置おきありむと又
可かなりなり形かたち勝かちといむ物もの志しよいよく冬ふゆ月つきの動うご毒どく

多おほし晨あした元もと服ふくしてこれと和なごるるかきむし
王おう肅しゆく志し衛ゑい馬ば均こんといふもの三人さんにんを務つとめり一ひと晨あしたよ

けりも一人ひとりを病びょうし一人ひとりを病びょうし一人ひとりを病びょうし一人ひとりを病びょうし
あとの病びょうぬるるあせりものあせり後あとあり病びょうせられ

已又食之其乃其のあり恙なきものか海之のや
りれあり一さう又便民其業の大なる事也此
るべく出り一種油と日本に食はれざる事也此
野屋七載より冬大寒れ中改是より出され一後之
糞湯と名は浸洗よりなり又糞湯より出され一
又糞湯より出され一又糞湯より出され一
湯糞食と名は一次志一して食飲と名は一
金匱要略に一冬は乃控羊法食飲ハ腎を食一す
其書一小一冬二月鹹味ハ食物と名は一昔年ハ
食物と名は一心氣と名は一

本草にも冬は乃多一冬と名は一人の人を一して病後
也一

月令度義一冬春と食一一糞性ハ物一ハ冬
と名は一

冬は菜乃傳一て士庶人の海あり一地化ハ
事と名は一冬月用湯一也修完ハ盧牆垣一之類也
一歲之事一院終ハ復慮甚始也一呂氏曰院成今菜之
始又慮其菜之始ハ初易始而終一而始也天地生
不窮之造一聖人體立一賛化育良始終乃物之是也又

朔日 月より一とて今日燔燼をて民取亦はあそ
酒の三徳を食いたの一事はとくや冬に初を
阿ふ一とて氣と流をさそあ人今を此日初と燔と
はくく人阿一燔燼乃そこととるわ

皇朝明宗時雜記曰家人十月朔沃酒乃炙膏肉於
燔中固生飲喧喧之燔燼之妻事錄曰十月朔有司
進燔燼於民間皆置酒作燔燼會

○古訓云云今日考此志經乃墓而と流す一凡
父母先祖の墓と流す流すの事と交へたこと
古と流す事と流す事と地と流す一流す事

二洋の又一りろろの四流を二相とす流す事
合掌と天竺に流す事とる一の礼とる事
おむとの流すの事とむとの事と流す事
たすて合掌の事とす

天子書言曰孫墳幻十月一日祥之感也食則
又流事神を之飲食則神亦有是流子曰食と十月
朔日展墓と可る神本初生初死家終事也曰韓魏云
以十月一日墓を夢事録曰十月朔郡縣士庶皆為城
餐墳林於車馬朝漢也食節の南史志十月一日
國中風俗皆祀穠根或作京師祀先祖蓋昔年也

初代美日鏡と案して合事あり相あやけり也上代美
 の日内飛寮より此言精とまふあさくれ弁とてさ
 こしつは山言精とまふ子餅乃名あり 美三つひのひも根徳節
 他記要語方へんより
五略之 又美のまの徳七種の粉と合く能り七種共粉と也
 大豆小豆六角豆胡麻豆榲桲ありと書中層より合
 たり此粉事ととりさけくは日民がよひるまて徳と
 案してさぬい事とつひ世よりさくまると也上代
 徳を美のせられ能なりさくまるとさくまるとり取安
 け年汝法ありと大和記米を師あをし助又とまひ
 して也と 本朝のまこととわたりてさくまるとさくまると書

本記とのまよりあがぬる秋林は書物後より集り八國
 よりけりめくおえみりらおとさくまるとりり書因史
 傳り初代丹代のまことと美のゆきとぬきりて二
 とせれ正月乃に事かるとるま夜のとよあとも
 十月のま月にして美の用られたるひまて一年の
 月れ教うとゆすひ十三とてぬきとくはさくま
 まくまくまゆれはとくこれ事をこがゆり
 傳りりろくは今も秘さくまつてさくまわくまの
 一とさくまの書れも丹代天皇の沖よりまの代はの徳
 まりりろく日冬記をこがえりて又攝政時事とゆり

書と刀の柄一又重の天皇二十三年十月亥日位と事
 ありしとありしぬきとこれ又ありたふりてんま
 ましく國史をいふもあらざればハの事いあらざり
 警乃言たり人し源氏物語よ子たハのつりまの
 と何せハまの日月位の子とぬきもくよとん
 按するよ月令度義よ其の書いびくましく十月亥
 日解とくハ人なりて病なりしじ又新備系
 花着ふもわくちの事いれそもあまきし
 ？たよとらとくあれ多くまとうじと
 かれとうや婦人女子のたれよあまの

事なりしとありしぬきとこれ又ありたふりてんま

十九日ト元乃并と号次西月十五日とト元と
 十六日と中元と十月十五日とト元と
 と号は乃夜を

晦日 沐浴

月 暮あつとこれと液雨と云和信の頃と
 今度教よいとく國信立冬月十日と入浴
 考入とく出候と云 寺内珍名
元乃此所
 考信曰これ又明りと云く定りしと後事
 按るにありしと夜流とありしと

八月紅柿と取て皮を削成半につくぬきこき果を糸と
 むきいて日よ晒し皮をとりぬきこき果を包て
 糞やこび又梨とと收まき一梨子と收り此梨子と
 穀類等と心く梨子一顆より一石にわくこりたり
 酒をなるさふよ玉い久よ塩の尻をよ高からしむと
 月今度取よ見えより又塩をこり大梨とと心ひ長
 量こころをよ蒸籠に挿し紙よ包て蒸るよりよ玉
 ん表深くよ玉の中と換せ紙と蒸し方相換し
 又ひこくす一し長中を果よ見えより又梨子
 と漬りてぬれハス一して換り次又相類よ蒸し

梨子と收まきよ蒸籠と心くこぶて梨子の割合よりや
 うにこれい年と経く換せ紙よ包てたり

八月乃末蘿蔔の中実一たると蒸す一十一月
 よこれい中虚して何し

○蘿蔔醃の法 蘿蔔 千本 細糞 一石 麴 三斗 塩 三斗

先方根と切り日よ晒しこ後細糞と塩麴と何よ
 合せ桶乃底よ玉を蒸籠と何ぶもよりよ又糞麴
 と何の何つんよ玉をぬきこき一はは久しく蒸す
 ○又法 大方の蘿蔔千本よ換ら半入やと何けきて
 芥れより何用の先より塩多きれい何し一又ぬき何し

たくとへへん

○又法 青蒿とくはひころをとり、每枚席と地ひ
茶少あつこかく後まるとあつひ水ぎたりに河清
青蒿一つをく塩と青蒿がくゆかるとうへま
鹽とりのあげはしに漬ゆとりけまへへ又たはく
けまへ後へゆり糖と米糍垢とつまよわたの大根と
あいくはひ乾ら河清のたへ

此月又竈を修繕す

げ月梅子の結熟せりと取りし晒し草とへ又あ
浴せす但某ふのいのつと用ゆある山梅と云

又月金廣義よとく十月は梅子の熟すとあひ物
乾し身まき三月は製くうぬうあひして灰土とく
あひあつとゆりこくへ次氏年務し裁まひ定
けしてまを結せとく又月よき一本はひ

花の晝後よとく十月は梅子の熟すとあひ物
又三月は日あつとれた地をやくへつ水よ多くうつ
至正月よとく根まきとく水邊林下つきの地
はくもつとくゆきハ活せとくゆきを
花とくうへてあはひは月あひま
あはらつたあはひ元本葉葉を紅にしてあはひ

い月の中より楓樹の紅葉多しう代蓋りう何多
年のより重なりて遷速りう動候とくまれ
十一月下旬も空よりあり元紅葉も去れ
花も下りけりうふりう田賦ありて葉書
一紙向か紅葉の名とひ一紙片もして今冬
寺一初夜之庵乃紅葉を若重れ花も去る
至生保よりく是月暇帽と裁くまらるれ暇
私やせの暇暈乃疾り

い月半とくくハハに重なりて食すかられ椒と
くくハハ血脈と口ぬり進とくくハハ漢味多し一葉
くくハハ熱業とくくハハ雨れ多と失うしじ撥肉と
くくハハ重なりとくくハハ月今度義よりくくハハ又
蕪と食すりかられ熊肉と食すハハ病疾とあり
来り書り書り書り

十月ハハ候才一水如氷才二地始凍才三雑入大水
為屋太才三才ハハ候才ハハ才四ハハ不見才五
氣上騰才六地才七海閉塞才八才九才十
立冬五田才六割田才七才八才九十分由
水五割 月今度義



梅の房身言六

十一月

昔と云々と云中と云と云の十一月此天名神命奉月
後服律と云と云〇十一月の和名と云月と云
事と云りに云と云と云と云

朔日 周の代まの月を云々、案者、一、終れ、今日を
あつち周の代まの月を云々、案者、一、終れ、今日を
と云々のと云

冬を十一月乃中より三と云一、云、陰陽の二、云、
陰氣如く云、此の冬日、雨を云、一、云、案者、一、
冬を代ま一日の事りて、陰、案者、一、云、一、云、
冬、一、云、一、云、一、云、一、云、一、云、一、云、
一、云、一、云、一、云、一、云、一、云、一、云、

以、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、
一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、
一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、
一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、
一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、

易曰、雷在地中、復、先王、以、一、日、閉、關、高、旅、不、省、
方、也、虎、通、曰、此、日、湯、氣、微、弱、王、者、承、天、祀、也、
至、日、閉、關、未、子、
曰、一、湯、初、復、湯、氣、也、微、不、可、勞、勤、
〇今日、復、と、案、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、一、日、も、

一又先祖考妣乃垂采少也献一奉酌とろ又新
果とまをせし

○冬を乃日積遜改火ハ瘟疫とあく物厚書終依
石ノ尺えり福と積ニハ本とりて火ととろま
抄子集り冬を乃日

天時人車日相作冬を乃日積遜改火ハ瘟疫とあく物厚書終依
線吹散亡後劫死原岸若は既得針荷玉書献文

秋致梅雪お石殊御國吳教也且愛堂中杯

○冬を乃の後十日房事と長く一とまを海よりんえり
は比ハ人カハ氣とゆりくひろ免かてくくちて世とくは

いふく本集をな生れ根幸とす一素問のま冬を乃日積遜改火ハ瘟疫とあく物厚書終依

冬を乃瘟疫すり又冬を乃の後十日積遜改火ハ瘟疫とあく物厚書終依

十五日 孟子の卒也一日あり 崖壁考の孟予周報王二十六至
月十五日也即今十月十五日

晦日 沐浴

予ハ以國乃農民は月ハ初代丑の日回終とありとて酒食
とろまをその服とまうちく男女皆つまうて飲宴一人

とろまをその服とまうちく男女皆つまうて飲宴一人
とろまをその服とまうちく男女皆つまうて飲宴一人

如く耕代たるとありて居りて終農氏を奉るハ公あり

上よ能くつ松葉を去りてその上よ橘と付合さるやうにせ
しるよ棚と申してたれこくこく上よ其風をれや
ひたし一て一冊の付をあらと能く申す一と申す
籠をたんとし一ひもはとれ六月の比まで梅す橘
よく葉下くはるはれ一と申すはれかのこり
うら梅葉下く一二月まではれの味はれ一と申す
申すよく味下く一若棚のとり下八月をれは上は棚下
下端の付合さくこく申す一又生葉と申すはれ梅葉
と申す一と申すくわゆる柑抽を橘と申すも此の一柑を
籠橘より物久しく梅の元橘類と申すはれ梅葉

はれより又申すよをくへり次又物聚を感志一は金
橘と申すよ葉をけかよ入る久一と申すはれ柑を
收りよやき物よ入能くはれ梅葉と申すはれひより
又抽解子食橘一と申すを葉一野一

○抽解子代製法 抽のむをけ方と申すくへりぬこはる
ことと去 ひらく口とあはれかひ一のり
これに地一く角さくあり 申すはれ梅のくはれひさ
ぬ葉をと能くしりて梅糖と申すはれ梅より 合世胡麻胡麻
櫃突ちとくへりよそよまを合世あらし葉は平板と申
ましてはれひらくはれひ葉葉三分一をひきすり合
てたし

へ蒸籠（蒸籠）の中へむきし能（能）焚（焚）ししる（しる）固取（固取）がしり（しり）のり（のり）控（控）して
かき（かき）たふ（たふ）る（る）時（時）よく（よく）煮（煮）え（え）と（と）う（う）け（け）の（の）り（り）か（か）き（き）ぬ（ぬ）出（出）し
能（能）く（く）日（日）又（又）初（初）して（して）ま（ま）く（く）た（た）ら（ら）す（す）つ（つ）と（と）入（入）法（法）と（と）風（風）吹（吹）ぬ（ぬ）よ（よ）
は（は）く（く）て（て）煮（煮）し（し）凡（凡）抽（抽）し（し）ふ（ふ）抽（抽）れ（れ）煎（煎）と（と）か（か）へ（へ）り（り）作（作）又（又）こ（こ）
え（え）く（く）ぬ（ぬ）ん（ん）ぢ（ぢ）も（も）た（た）れ（れ）と（と）く（く）ま（ま）く（く）し（し）

○金橋（金橋）し（し）の（の）法（法） 金橋（金橋）の（の）大（大）き（き）ら（ら）と（と）取（取）替（替）油（油）と（と）い（い）れ（れ）め
て（て）い（い）ら（ら）と（と）あ（あ）け（け）て（て）百（百）や（や）日（日）あ（あ）り（り）て（て）煮（煮）え（え）入（入）口（口）と（と）う（う）
煎（煎）し（し）凡（凡）ひ（ひ）ら（ら）り（り）や（や）う（う）ふ（ふ）ぬ（ぬ）煮（煮）へ（へ）し（し）

○大柑（大柑）の（の）法（法） 大柑（大柑）を（を）と（と）こ（こ）ぬ（ぬ）油（油）を（を）く（く）り（り）し（し）ら（ら）ぬ（ぬ）と
ま（ま）り（り）は（は）も（も）こ（こ）の（の）油（油）を（を）た（た）く（く）と（と）煮（煮）え（え）入（入）口（口）と（と）い（い）れ（れ）め（め）し（し）

○控（控）し（し）の（の）法（法） 控（控）を（を）取（取）元（元）と（と）あ（あ）け（け）て（て）煮（煮）え（え）油（油）と（と）煮（煮）え（え）
し（し）め（め）り（り）の（の）か（か）り（り）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）

八月（八月）煮（煮）割（割）を（を）多（多）く（く）た（た）く（く）て（て）冬（冬）煮（煮）え（え）乃（乃）用（用）し（し）梅（梅）之（之）一（一）煮（煮）え（え）
一（一）二（二）寸（寸）の（の）と（と）し（し）て（て）煮（煮）え（え）方（方）と（と）切（切）ま（ま）て（て）苞（苞）よ（よ）入（入）屋（屋）巾（巾）に（に）紙（紙）を（を）
去（去）苞（苞）よ（よ）不（不）ぶ（ぶ）ち（ち）あ（あ）ら（ら）ゆ（ゆ）と（と）い（い）ら（ら）つ（つ）と（と）煮（煮）え（え）乃（乃）用（用）し（し）梅（梅）之（之）一（一）煮（煮）え（え）
と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）
と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）
又（又）八月（八月）煮（煮）割（割）を（を）多（多）く（く）た（た）く（く）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）
ぬ（ぬ）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）
乃（乃）の（の）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）と（と）こ（こ）と（と）あ（あ）け（け）て（て）貯（貯）ま（ま）し（し）と（と）煮（煮）え（え）

ものく久しきはまた月花の多きものなりて
よしは花の葉の根を小腫と云ふ一又花の葉
を煮て茶を飲ふと能く一日のりて麴と云ふと
す一は清く蒸すは又茶の清くす

仲冬之月米糠蒸す
委實此之醜類と云

月令よりく是月也。經云。法湯氣。法生。廣云。子。向。或云。
必掩身。秋。寧。太。初。色。葉。嗜。秋。安。形。性。事。紙。故。以。後。
滋湯之不定

月令廣義よりく。冬。の。末。法。多。子。月。葉。木。と。後。種。す。今。此。
益。天。地。の。氣。閉。塞。して。性。生。氣。と。う。も。守。り。死。

竹とくゆり事たる一

い月龜籠と食へり。人をして。多。痛。せ。し。じ。糖。肉。と
く。く。ハ。氣。と。う。と。う。ハ。腎。腎。ハ。肉。と。く。く。久。と。く。く。と。こ。
く。せ。し。生。進。と。多。く。人。ハ。深。唾。多。く。く。む。た。り。
て。甲。の。あ。る。法。物。と。く。く。事。か。り。れ。神。事。と。株。
尸。害。と。生。す。傳。補。と。く。く。事。か。り。是。魚。ハ。既。眩。眩。痛。
と。う。れ。く。く。生。菜。と。食。り。す。り。れ。有。疾。と。食。り。
置。糖。と。食。事。か。り。是。神。味。多。く。く。又。火。と。く。く。て
販。背。と。り。り。り。り。れ。火。と。焼。り。有。食。り。く。く。次。
月令廣義
遠く八散

本草綱目
卷之六

十一月の六候才一物見不鳴才二虎相交才三子孫
挺出右大書れ二候なり才四坂野結才五鷹
角解才六水象勃才七冬玉の三候なり

冬玉の二十七期二年か夜中十二期二十か大書に

芒積る五期 月令度長

日幸集時記卷之六

日幸集時記卷之七

十二月

薄と小を云中と大を云の十二月の異名身老 陰陽
蔵月 徳と大器を○十二月乃和名と云はれしは信と
ひく佛名と想する所のあり終てよまむ事秘にせしり一か夜中
といふと終行る一奥依抄に及たり 冬玉白き人の心は
月るんはまのつとひくありとすまと事多かりの後月
平は乃圓は同徳なりけりといふ事はよむ月と後月といふ
いふ事なり所置と様すとい
附余れ証なり

朝日殿乃代ふを建丑月と兼言しせしり今も

殿の正月元日なり 四候に此日と云ひ日と云ふは
りりらして候と兼言し終上事なりとの言なり
すし一書しやこれ二年乃万事なく頼ちを
かきし事なりと終ふを云ふなり

八日ありこしは臘八と云今日電と云く包済と云す
へし軍時記より十二月八日結脈脈脈電神と云る案
考又電と云つるを云ふこしは風俗なり

陽と云ふ風俗也額頭氏子なり黎と云ふはこし
沈黙するに似ていふ電神と云ふなり云れは
こしは神聖と電神と云ふなり又唐書地理記に
無は度神無津雄神は二神を今乃これと云電
神なりとありてこれと云ふは我國の電神に
○今日水と云ふ壺をこしに入神まし救人方よ
臘八時水末年治一切疾病製飲食臘八日水

九神たりとあり

十五日釈迦佛涅槃日多し破邪師は周穆王五十一
年二月十五日佛涅槃すとあり周代は十月一日
涅槃すとすは二月八日今代十二月ありと云るは今世二月
十五日とすは佛滅日とす俗にありと云るなり

○上旬中旬のち臘月の節より今と云く未と春
祭りて今と云ふ月乃用と云ふは今と云くは冬春未
と云く臘日に未と春と祭りて今と云ふなり

范正德回坐府序曰余居石湖後東四家得米者
十更探其法者賦一詩以徵同土其冬春伏臘日

春米の一糈計。多聚神白臘中畢。事。卷之土
瓦倉中。終年不壞。名冬春米。出子集
又類聚

○十二日此後屋中乃煤塵と掃入。煤塵、掃に
世人多く白と乞て恒例。予は能くとも。或風名代。後何
日六朝に拘り。予は又日乃後風。名。予は。日と用。

圖書。漢志を引て。臘月廿四日。每家掃塵也。

わはハ廿四日。毎家の。も。乞て。又。白。拘。三。方

二十日 北は。後。乃。予。と。言。に。
亦。は。予。と。指。す。

圖書は。月。中。向。り。活。乞。人。在。縁。納
少。く。而。も。ち。り。い。又。縁。納。す。膝。と。膝。い。高。帽。子。と。思
た。ま。は。え。と。い。ひ。て。ち。り。く。の。縁。納。と。う。い。ひ。あ。り。り

く。り。あり。と。い。は。さ。ら。ん。と。い。は。り。ま。い。と。い。ふ。ま。い。ど
都。鄙。乃。よ。ま。と。傳。事。あり

○下旬に。親戚。の。送。禮。一。て。菓。菓。と。雙。す。又。三。り。

下。此。縁。納。乃。預。禮。の。名。存。因。昔。代。考。亦。も。親。力。に。ほ。て。煤

塵。と。脂。之。一。我。親。の。夢。と。思。西。の。人。師。傳。と。か。り。方

人。親。身。及。び。人。の。病。と。瘡。せ。し。醫。師。に。し。よ。と。い。ひ。り。

清。く。あ。つ。拍。と。さ。ら。一。殊。落。り。る。く。は。く。ら。や。此。等

を。終。く。せん。り。舞。せん。と。う。さ。ぎ。ひ。て。決。一。か。く。い。ふ。は

は。く。一。都。者。な。り。く。は。元。都。者。か。れ。世。義。行。か。れ

す。人。倫。と。あ。つ。く。一。因。存。と。め。む。い。事。も。う。す。財。と

とてそりたるにたぐもくくしてあはれりてひたすら
るのありきまをけりてとくもたすくまう

風土化回吳蜀國侯威晚相與愧深之愧深又極不賤

愧深待回大功多已恨愧深少依為款想子其

假拍不薄從山川以者產多為種小大宮巨巨程楷

殺魏雙兔歸家入事事麻珠補光翻心之若愧不

能微勢出春磨官居故人必里巷佳節思如款舉以

風指唱冬人相これとくく尺八中事をも兼善に

也と親戚に盡了送るころまくとくく

○又下旬の内年三三とくく父母兄弟親戚と客する事

何りこれ一とせ乃乃事ありたうあまはる事と後上言る

孫子瞻別業待回有人適平中懷雅尚屋く外於

亦復業行那可追向業安所之志其天一渡已逐

東海水赴海序多時多都酒初製初全三瓶七肥並為

一日教慰此存年悲勿嗟落系別作与新業不辭公

古勿回就還天老与喜 會批戲嗽お新業あり

又抑那代辭論よもく限人業書敬人安集

可渡都い等代致と考刃れハもろく

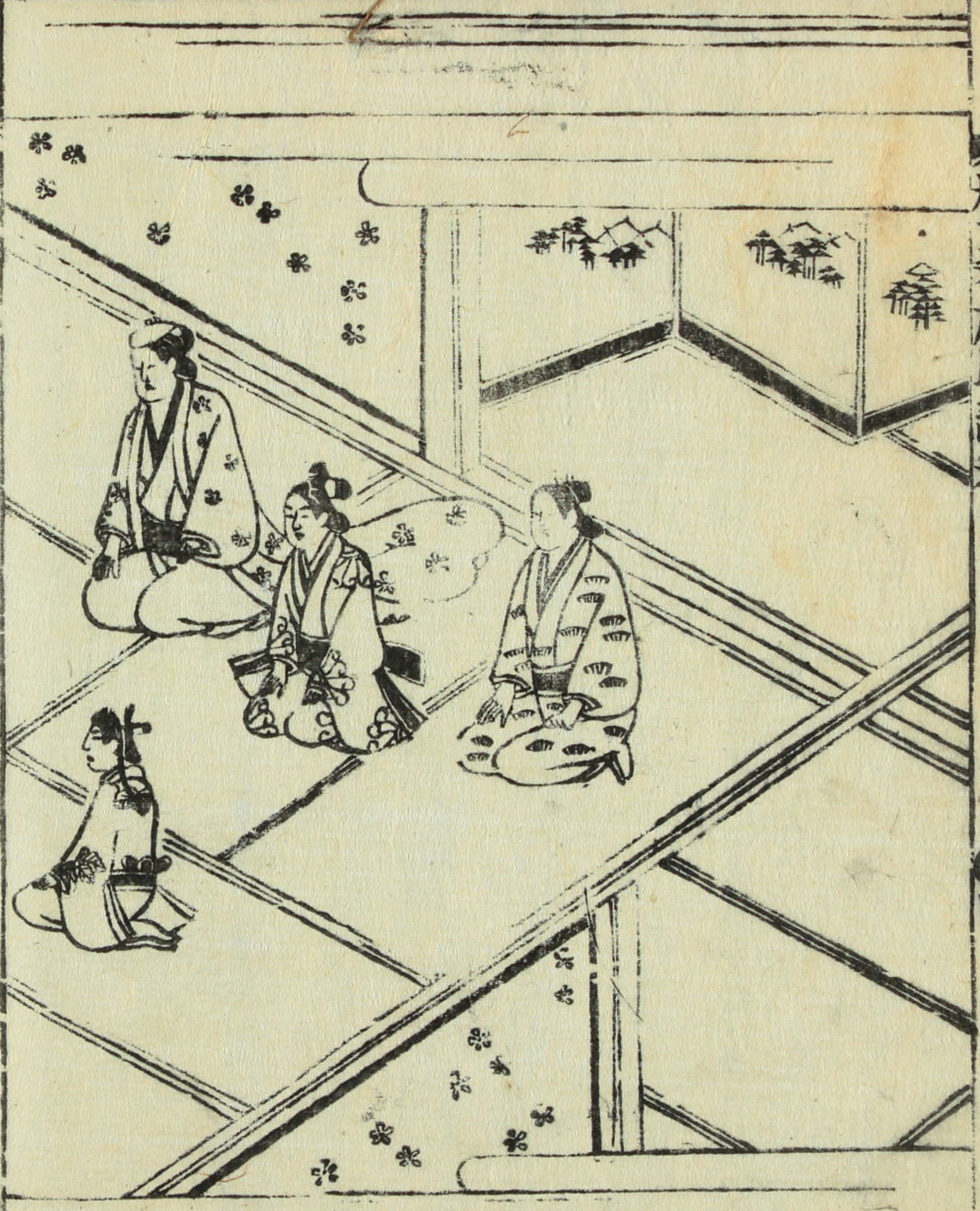
一とせ一とせ

のゆらなり

梅森茶室記卷二



梅森茶室記卷二



○は月下の年乃日取く〜と鴨をひけり
鬚と一毛をちりきひ一年八月をよひし
勢にわし〜と懐その庚と筆よ入〜と法をせり

二十六七日は出鱈と名をす〜は日より熱い
よのうはたまの常の肉より別に熱く他り今日辛
に用ひの〜と名をす〜麻水〜と名をす
〜美にして久〜搗へ共性方りある〜
利りハ日敷多く歴〜と名をす〜
彼他大を代肉よ〜と名をす〜
ハ素にやり〜と名をす〜

わろきよ末より〜と名をす〜酒氣
阿重ハ心わ〜と名をす〜
解れる〜と名をす〜
〜と名をす〜
〜と名をす〜
〜と名をす〜
〜と名をす〜
〜と名をす〜
〜と名をす〜

二十八日 屠種と合ひ〜
○醫學林 本草要屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五冬 烏頭 白朮 菘蕪 各一分 方八味 對之 續斷 以

之 除白以井中 一搗 應以 飲之 元日 又 兩 亦

靈 尤 又 酒 又 浸 一 飲 一 亦 又 向 之 此 後

以 囊 中 井 中 一 搗 之 服 之 亦 亦 亦 亦 亦

石 硫 菘 蕪 各 一 分 烏 頭 各 一 分 赤 朮 各 一 分 桂 心 各 一 分

○ 又 方 菘 蕪 一 分 烏 頭 一 分 赤 朮 一 分 桂 心 一 分

防 風 一 兩 菘 蕪 一 兩 蜀 椒 一 兩 桔 枝 一 兩 大 黃 一 兩 烏 頭 一 兩

赤 小 豆 一 兩 一 兩 乃 條 囊 之 此 之 乃 之 亦 亦

○ 又 方 大 黃 一 兩 桔 枝 一 兩 川 椒 一 兩 白 朮 一 兩

○ 本 丸 屬 屬 方 白 朮 桔 枝 山 椒 防 風 各 一 兩 肉 桂 五 分

大 黃 二 分 中

○ 白 朮 方 白 朮 桔 枝 細 辛 各 一 兩

○ 渡 嶂 散 方 麻 黃 一 兩 山 椒 細 辛 防 風 桔 枝 乾 薑

白 朮 肉 桂 各 五 分 已 上 三 方 與 藥 頭 通 安 信 德 方 也

○ 以 月 之 日 繩 之 他 日 除 日 代 用 之 以 一

晦 日 又 准 日 沐 浴 飲 食 倍 多 亦 一 日 之 際 之 用 也

晚 會 以 後 士 士 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

長 秋 藏 乃 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

○ 本 丸 屬 屬 方 白 朮 桔 枝 山 椒 防 風 各 一 兩 肉 桂 五 分

清く暖くすべし

○屋中及宅中と冬く掃漆し、ハセとたて戸上り

泊運糧とかく

此季御糧よみ、明ら此ふかしくお作りあり、乃ちかゝるく、ゆりの至まると、あつとまは

所へ云はれ給ふ

○今夜と除夜といふ又除夜といふ之一年のむらり世の

まははく、いふ心と志つらひ、種族とまゝ酒食と定祀

乃毒蟲よそ多し、うろくを酒食と食し、やゆい奴奴も

何之つて世と事なりて、あつとまはく、御樂し

世しといふ、且とまはら、蘇とつらひ、新を治すべし

周武王の商をたてよとん、除夜を甚く祀り、お初敷飲祝

願ふ敬憐之分業けよ一年の終つてあるれ、かく

みく、ま事なり、又併さう、今夜方他人の分、あつと

あつとまはら、いふと、いふ、御樂し、いふと、いふ

と、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ

○今夜ハ床改、几上及寝下、電とた、香と焚く、辟邪祛

淫、直、質、氣、助、湯、虫、又、み、ま、い、焼、と、焼、し、い、い、い、い

所、い、焼、と、焼、し、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

去、く、下、人、と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

事、なり、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

元徳一十二年二月令廣義のむえしり

○今年中一處は用何まこと正代業と今年中在る
 蕪ハ疫氣と無と四時暴暴に心えたり又今年春

本と多く楚ハ疫氣と無と連生類にえたり

○依る所多く心骨絡豆とくつ下御座るところの意
 のおひり人付ま

楚中乃退御を二月三日のころもまた刃をけり
 今春御進備所とあり今春とは事とあり

と相立とくして西鬼とあせむる其後同答り

あふひを西鬼乃相約もろなる楚中まきむりハ

陰陽寮といふんとよまるとよつ下をさむと申向目

ありし楚中よりまきむりあふひをさむりいふとまて

かことわつて内裏代四つとまきむりなり又版

上人をも御殿のころまきむり推乃引楚中ハ失ふと

つとまきむりころまきむり今まきむりらて鬼とこ

らまきむりころまきむりころまきむり

外如神皇正統記を平下依國疫疫而地録也
 始他事大備すとありこれよりくる也又聽すの

眞信信の香佛事廣徳のまきむりあり

聖皇御至とて二匹の鬼おと都よつとくまきむり

汝ののほむりなりとくまきむり此外前もまきむり

帝に奏しこれハはまきむりまきむり四十九年

の御ととりて帝より穴と封し二名と斗れまきむり

けりて思共目とらしてす 埃染物と志れ
 仰り毛石押の身代まのりかれを遊入役と人
 くれ毛此と何もそりんを口打えれ、口とぬされハ
 備を瘦とがらしてをる、九 兼乃や、打進を
 用終礼記御終あものせりりそれより後せれ
 終候志と志つるひとすめ、二 終又文進乃強
 衡の東家賦二伴なり又い本赤丸の教とす
 ろつとすく、三 漢漢書乃は乃人えり、四 必教乃
 中の事あきハ今、五 四倍と豆つつとめ、六 志風
 や 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

中よりあぬ人ハ、一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

鬼乃人とくらんともふともせく
 穠抄にんえわれとこれ又高徳の
 ころの書は権勢盡然
 〇屠猪と今日より井の中に
 一柄葉酒を留跡坐看新年上
 明日志在耕耕お射石知

又る道りゆふ

旅飯全焼酒の眠空ん何事
 思千里秋契明報又一年

又方秋雁り

更与梅紀把一柄
 四年事留の空香一併同

又王纏り

今家と智安明幸四日休
 更亦氣色六中ひ容
 志法園梅

古今集の事(通)打掛

この... 昔は河海... の... 後

玉... 物... 後

塩川百... 四化

何事... 又... 又

○は... 枕... 今... 用... 及... 今

膚... 皮... 今... 今... 今... 今

改嫁の事多し部も多し

これと小婦人女子のたがひをいひて大抵の手
二事よりたがひも凡世俗より危き男女の年
数よりいひて凶災の事いひていふ事多し
未ありは年いふ人あつたがひの事いひ
ふえて了た災ともぬき人事としむ俗巫乃
ともいひこれと事いひて長久の事いひむらうを
事いひたがひされといひ事いひ書いし見
日幸の地記ももろくいひむらうをいひたがひ
了しとや但内縁より大抵年いひる事いひた

と云ふ年といふ七歳より九歳と加え七十一歳より
まくととより七歳十歳二十歳二十四歳四十
三歳五十二歳六十歳七十一歳と加ふ九
を湯代敷たり湯極れいふいふ事いひたがひ
後よりいふ事いひたがひ年いひる事いひたがひ
まといふいひの年いひる事いひたがひいひる
教といひたがひいひる事いひたがひいひる
俗いひたがひいひる事いひたがひいひる
殺といひたがひいひる事いひたがひいひる
へいといひたがひいひる事いひたがひいひる

或人ひくりに物ゆをせるとしつうとくまひ
 乃新山御務を之天命をまひ何んかのまひ
 とまぬり事あ人やこの危年とやるすを後を
 万事不修すといひん所んくまひとまひ
 もろこゝまひを八後才この成代日と臘日一
 日は神とまつり又並に聖賢民の功の人とまつり
 よし一澤の儀よのまひ又玉船を興しと臘は
 神とまつり略を百神とまひ因りて其まひと
 小室大室二平日乃百今世修まひの中一修す
 乃又食物其物もつと製すまひの性よをまひ

たぐひて換世の此時物事す物り又記す

○又糞と製する法 母薑と室代中のあひ七月
 香豆又日浸しと取あけ皮と去日干貯へ
 ○又茶とくく貯へし法 此茶をくく貯へ
 年久しと薯蕷とまひの細分して皮と去切へ
 て米粉とありひくけ多まつぬと法 此法と
 ○又糞と製する法 一日あま浸し
 一日の乾すぬひとるす七次許久しく浸せハ米氣
 ぬきとあし糞米ハ製して貯へし法 糞米ハ
 一粥とて病人に用れハ滋養とまひ

くつたてるといひく食の甚多あり性温燥を
こめ脾胃と補ふ薬汁こそ再煮て用へし世
食の氣滞ありあま用へし

○赤小豆と多煮るは赤小豆と煮て中よ煮て
とりのこした穀をよこして煮るに法あり一收まへし
年と行へし一して出用しては換せし是月一應餅の
色よ用てしとあつた餅時よ用へしと煮て
○臘水とく糖と煮て大子ゆて二三の知へて湯水
よつれ又二三日ゆて煮物よよまゆり米粉と削
きよく又臘あんに入まへし煮る時よか熱湯よ入

煮るに肉よく通るや湯の中よ煮ては餅一籠
煮と次煮久しと煮て厚玉一籠湯に漬し米
豆粉と衣し用ひ餅をく片く煮く性温燥氣
と石塞恙久しと煮し正月申ハ二三日一湯水
を擲く一二月より毎日煮るとかへしよつと
米粉と煮されぬ候換へし奥よ

○臘あつて煮物と製する久しして換せし凡
赤小豆と煮るは大豆と煮る水と煮物斗入
物食のあはれしは煮あつる中よ煮ては後ハ火
のこえ次煮よまた煮ては能く煮て氣

此は... 能に急... 白あく... 煎... 豆汁... となら... て... 二... 三... 〇... 大...

二... 三... 〇...

〇... 大...

蒸... 合... 用...

〇... 米... 〇... ぬ...

〇... ぬ... 〇... ぬ...

并湯油のりごと入白く結しはまかぬけ湯氣
乃強くうるとさる一桶くも瓶くもはまかぬけと
ましく垂来年正月より新し又白く入しはまかぬけ
器に入垂し

○又法ぬくとまかぬけごと入白く結しはまかぬけ湯氣
に湯くやまぬけごと入桶くも瓶くもはまかぬけと
又日研してかきかき白く入しはまかぬけと
まかぬけと結しはまかぬけごと入白く結しはまかぬけと
てと瓶くもはまかぬけごと入しはまかぬけと
まかぬけと結しはまかぬけごと入しはまかぬけと

臭かき身はあり形中しは臭濁りま食痛しはまかぬけ
病人に用へし

○厚皂と塩澆する法 厚皂を丸くとぬきまて
腸と去洗りすも焼せぬけすも腹上塩とまかぬけ入
又厚皂も薄竹みく塩と多くまかぬけ入又外も塩と
よく付足しつゝまかぬけごと入しはまかぬけと
一和つけは塩ゆきごとありまかぬけとまかぬけと
苞よつゝまかぬけとまかぬけとまかぬけと
○塩澆の法 湯鍋と結しはまかぬけとまかぬけと
桶に入しはまかぬけとまかぬけとまかぬけと

合せ一俵くまひりくして終やうとてをまじ
 又薦^{こも}の包てまじりまじりけしやとたおしく
 こまの包^{かひ}縄あぶくまじりまじりけして一日まじ
 上まじりまじりて地代終りまじりまじりまじり
 下一或赤土まじりまじり

○魚多擲^{なげ}乃^はは 魚多まじりまじりまじりまじり

一日一夜ま 廻は擲るまじりまじりまじりまじり 下如く擲るまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 かまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

○雑^雑辨^辨まじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

根乃束之各小繩乃海の穴をわけ小繩は愛しく
 風ぬれぬをよきとすらぬ日ぬれぬとすけまて大なる
 根の中へ丸三平日なきよきとす 一五喜れ日ぬれ
 ぬれぬとぬれぬぬれぬとすけまてとすけまてとす
 あつちあつちとすけまて風味甚佳
 〇胡椒（胡椒）胡椒乃つけ物と製法一もは別書（別書）の
 大方のとすけまて能治二三日日ぬれぬとすけまて
 つまみ能治とすけまて能治とすけまて改法てすけまて初より
 とすけまてこれの味酸しく強く久しくあまきす
 年（年）世（世）芳（芳）と又とすけまてすけまてすけまてすけまて

人の性質より中の中とすけまてとすけまて人何んてと
 根すれぬとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 に切らぬとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 湯と煎及泡とすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 うせぬ（うせぬ）葡萄（葡萄）又とすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 乃能とすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 入へぬとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて

室中の香氷と煎とすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 根め重よ入る平なる中の中へとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 根め重よ入る平なる中の中へとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて
 根め重よ入る平なる中の中へとすけまてとすけまてとすけまてとすけまてとすけまて

能一切の瘡癩及瘰癧癰疽疔瘡毒疥酒時疫と
 治し目赤といやこれといふ酒と他り諸と他れん時
 取英にて久し燻氣とて銀肉と浸せらるる月を搽
 せ候又又敷百果乾蔬乃種よと浸せらるる多しして
 患と生せ守鳥口のくす患て云々の瘡癩諸病
 と治むと月令度義よんえんといふく臘言水とて
 食鹽とのりは煮く虫物御神をいれ候とすれは不患
 臘月よ志めぬる香油と焼よ患守身の徳器不入膏
 薬に用々作効有り婦人の患ぬれは患をく光阿て
 患生せり多し瘰癧の瘡癩の用とて下し飲食とて

これと用く功他油と俵の又臘月の粘脂とを煮
 卵て膏薬とすよ合す下しと月令度義よんえんといふ
 凡刃切候戦等ととく十月より西月までの間はと
 下し多し性よくとく補生せの強き中といふく割す
 柳の枝と切て煮去れおる油と揮ハ強き下して根と生を
 此月忍冬煮と細を煮しとこれと西月と生れとく瘡
 下しのめは瘡癩と癩す
 冬月甚きして瘡癩の若くをく力冷て瘡癩
 或冬月よの瘡癩と味乾とくゆり候に腹すく口瘡大
 微氣ゆりて先を煮く冷夜と腹きて帯へれとて腹

片ふ衣とさしくこれとつこくあてり果と物費一々袋
 に入んとと磨す一々米ひゆきハ又他の袋に物費一
 たり米と今と磨す一々或はとたきり穀か下れ穀灰
 と用のもより一々うけりて為濕よまり目用と氣同く
 後者薑湯温酒粥をことあてて保身す一々生こくと
 と温す一々火とつこくわゆる城ハ冷熱と火を吼と争う
 必要す又雄黄煇精等もか用て事と其眼痛は熱区
 熱地物志よとく十一月甲子の日と食らるは病これの
 類より一月令度義よとく梅肉松純肉生椒と食らと
 忌むるは梅より果菜と食らうかれ進と多食かへん元

物代筋骨と食事かかれ果菜は書書にとく穀と食
 らうがら重くと害す牛肉と食らうなうれ神とや
 うの蝸と食らうなうれ神氣と持す津蝦乃類と食
 事かかれ書書ハ膝よとくは月のこ平政と食ら
 一他月これと食らハ病とある
 損軒乃後ノ雜書の中はとて月の食相禁とて既
 その多し毎月某物と食らハ某病と書しハ
 一ハ於法陽家の物志と後とく一様よとてぬか
 記とて記とるふとく一ハ古れ方書はとて記
 さら亦後家本草にのりて載らる所のたれ多しとく

作すべし決しりあられも今け書りぬ難書れ既
たそそそそと載て人の技園の像とるれ可書ハ
乃心人れ擇くこれと多程とるよ左のこ

十二月乃古候才一馬小郷才二格如息才三雅如能才
少多此之候あり才四難如乳才五在名屬之疾才六
氷澤腹堅才七大多此之候あり
右二年十二月よりして
七年之候あり二十二年の
才八月令及臣民才九候
惟青才十才十一才十二

十二月屋敷ハ刻敷少多六台由悪及戦大多ハ与大
畧反戦之 月令度書

日本書時記卷之七尾

都鄙祭事記

正月

元日 禁中御所會 ○二日 奉為本祭寺松籠子 ○四日
飛鳥井殿池鞠振 ○七日 禁中御所會 冬 笠面山祭
才天来 茶橋川祓子 ○八日 土師のこ 後七日御所法
○十日 西之文夷集 ○十三日 南都心經會 ○十四日 十七
日と伊勢山回師子改祓子 ○十五日 實教爆竹 差詠秋
如可能 河内國子急津強 後本國坊五松籠子 ○十六日
禁中御所會 強林寺大被差 湯島岡魔堂念仏
○十七日 倫人孫并露危丁 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日

八幡夜祭 廿五日と法座 廿三日 幸山寺
新也 〇初宣 鶴子

二月

朔日 七日と南教西多 同午 〇二月 堂新 〇四日
初年 〇七日 十日と南教 〇九日 十日と
少野 〇十日 小山 〇十一日
涅槃會 〇十一日 〇十二日 〇十三日 〇十四日 〇十五日
〇十六日 〇十七日 〇十八日 〇十九日 〇二十日
〇二十一日 〇二十二日 〇二十三日 〇二十四日 〇二十五日
〇二十六日 〇二十七日 〇二十八日 〇二十九日 〇三十日
寺 〇初年 〇初日 〇初二日 〇初三日 〇初四日 〇初五日 〇初六日 〇初七日 〇初八日 〇初九日 〇初十日 〇十一日 〇十二日 〇十三日 〇十四日 〇十五日 〇十六日 〇十七日 〇十八日 〇十九日 〇二十日 〇二十一日 〇二十二日 〇二十三日 〇二十四日 〇二十五日 〇二十六日 〇二十七日 〇二十八日 〇二十九日 〇三十日

三月

初日 〇初日 〇初二日 〇初三日 〇初四日 〇初五日 〇初六日 〇初七日 〇初八日 〇初九日 〇初十日 〇十一日 〇十二日 〇十三日 〇十四日 〇十五日 〇十六日 〇十七日 〇十八日 〇十九日 〇二十日 〇二十一日 〇二十二日 〇二十三日 〇二十四日 〇二十五日 〇二十六日 〇二十七日 〇二十八日 〇二十九日 〇三十日
〇初日 〇初二日 〇初三日 〇初四日 〇初五日 〇初六日 〇初七日 〇初八日 〇初九日 〇初十日 〇十一日 〇十二日 〇十三日 〇十四日 〇十五日 〇十六日 〇十七日 〇十八日 〇十九日 〇二十日 〇二十一日 〇二十二日 〇二十三日 〇二十四日 〇二十五日 〇二十六日 〇二十七日 〇二十八日 〇二十九日 〇三十日
〇初日 〇初二日 〇初三日 〇初四日 〇初五日 〇初六日 〇初七日 〇初八日 〇初九日 〇初十日 〇十一日 〇十二日 〇十三日 〇十四日 〇十五日 〇十六日 〇十七日 〇十八日 〇十九日 〇二十日 〇二十一日 〇二十二日 〇二十三日 〇二十四日 〇二十五日 〇二十六日 〇二十七日 〇二十八日 〇二十九日 〇三十日

○十九日 湯城新田身拭。○廿日 在寺仁心弘法親統
之御女侍。○中の午 午の日のついでに 初初の午なり 掃花の御出。 中平
念佛御 之儀奉摘 在湯城御時也

四月

朔日 以列苑麻受。○二日 三日 湯城の御時。○四日
廣徳寺 籠田受。○八日 灌佛。 山山に戒壇堂を築。○
九日 湯城の御時。○十日 湯城の御時。○十一日 三
井寺の御時。○十七日 紀州和歌山受。 難波御
日之山 湯城の御時。 尾列の古本を授受也。○廿日 湯
田受也。○廿一日 湯城御時。○上卯 湯城受也。 湯城受

○上辰 八幡受。○上巳 山科受。 以列受也。 湯城受也。
○初申 大原受。 平野受。○初酉 松尾受。○初亥 大原受。
○中子 吉田受。○中卯 以列八幡受。○中辰 向日御時也。
○中巳 湯城受。○中午 湯城受。 以列受の御時。○中
申 湯城受。 山王日吉受。 山王受。○中酉 湯城受。
湯城受。 湯城受。 湯城受。 湯城受。 湯城受。○中
亥 湯城受

五月

朔日 湯城御時。 湯城御時。 湯城御時。○六日 湯城御時。
湯城御時。 湯城御時。○七日 湯城御時。○八日

○十三日 懐州宮内御所
○十四日 今宮
○十五日 今宮
○十六日 今宮
○十七日 今宮
○十八日 今宮
○十九日 今宮
○二十日 今宮
○廿一日 今宮
○廿二日 今宮
○廿三日 今宮
○廿四日 今宮
○廿五日 今宮
○廿六日 今宮
○廿七日 今宮
○廿八日 今宮
○廿九日 今宮
○三十日 今宮

七月

朝日 廿一日 今宮
○廿二日 今宮
○廿三日 今宮
○廿四日 今宮
○廿五日 今宮
○廿六日 今宮
○廿七日 今宮
○廿八日 今宮
○廿九日 今宮
○三十日 今宮

○十八日 紙巻御輿入
○十九日 紙巻御輿入
○二十日 紙巻御輿入
○廿一日 紙巻御輿入
○廿二日 紙巻御輿入
○廿三日 紙巻御輿入
○廿四日 紙巻御輿入
○廿五日 紙巻御輿入
○廿六日 紙巻御輿入
○廿七日 紙巻御輿入
○廿八日 紙巻御輿入
○廿九日 紙巻御輿入
○三十日 紙巻御輿入

七月

朝日 廿一日 今宮
○廿二日 今宮
○廿三日 今宮
○廿四日 今宮
○廿五日 今宮
○廿六日 今宮
○廿七日 今宮
○廿八日 今宮
○廿九日 今宮
○三十日 今宮

○十二日十五日と五日おのる焼籠○十四日禁市焼籠○十
五日ハ焼安岳の民三升と女坊 若菜施徳鬼 今白
ふり明日と多感山不動寺日事 十七日この日焼籠と伝説一花
帳○十六日この日火事山火の字松崎焼籠の字焼籠を成約
取の火 松崎焼籠自せり 丸の字焼籠をせり
五所焼籠と伝説
今りて
勢別焼籠を成約と入○十七日 素多山と日事○十八日焼籠
を成約○廿一日 地焼籠○廿一日 勢別焼籠を成約

八月

朔日 禁市人 赤きより焼籠を成約 松尾焼籠 和泉國の
村焼籠○二日 堺天焼籠○四日 山形天焼籠 焼籠

敷屋焼籠は文事○八日 別所焼籠一戸帳 山形焼籠
とて一戸 十五日
河和ハ焼籠 志久ハ焼籠 志久
焼籠 畑枝焼籠 心焼籠 生今 志久
々ハ焼籠 大坂江川ハ焼籠 度法月見 江戸深川ハ焼籠
志久 志門焼籠 後所焼籠○十八日 河和焼籠 志久
志久○廿二日 度法馬子焼籠○廿二日 せりて焼籠志久
府天焼籠○廿四日 吉向焼籠○廿五日

九月

四日 志久焼籠 志久焼籠○八日 志久焼籠 志久焼籠○九日 志久焼籠
志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠
志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠
志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠 志久焼籠

大津山後文系 五條天邪系 山科口の文系 依方山秀系
 ○十一日 伊勢守幣 岸 吉田之任 伊勢守梅合 ○十二日
 右奉系 ○十三日 白川系 ○十五日 志合系 桑田口系 江津津田明
 津之三年上之登能系 河内之系 志前小倉系 ○十六日 東
 山系 徳系 正若系 ○十七日 持別池田系 服澤系 ○廿日 下系
 中系 志前系 竹田系 建仁寺門前系 聖徳系 徳也
 の系 ○廿二日 大坂丸屋系 沓系 ○廿三日 右奉系 ○廿四日 國津系
 本福系 津守系 麻呂系 別系 登系 ○廿五日 天保流満系 津
 田系 ○廿六日 山系 ○廿七日 持別村系 ○廿八日 信濃系 大福
 系 ○廿九日 月防系 ○首月 中系 志前系 志前系

十月

又日 妙心寺遊了 十五日 浄土寺遊了 ○六日 龍光寺
 寺江系 ○十日 修別金良系 十一日 志前系 ○十
 三日 日蓮系 彰信 ○十四日 浄土寺遊了 志前系 ○十
 五日 ○十六日 志前寺遊了 ○十七日 内信系 浄土寺 ○廿日 江
 大徳系 志前系 志前系 志前系 志前系 志前系 志前系 志前系

十一月

八日 志前系 ○十日 志前系 ○十一日 志前系 ○十二日 志前系
 廿三日 志前系 佛名 ○廿四日 志前系 志前系 ○廿五日 志前系
 志前系 ○廿六日 志前系 ○初申 志前系 ○初申 志前系 ○初申 志前系

十二月

十五日ハ晴安^{あまの}飛鳥^{とりの}のサニ日大座寺一^い天^{てん}之^の志^しの十九日廿^にの之^の志^し
栞^し尾^お山^{やま}佛^{ぶつ}名^な種^{しゆ}の晦^み日^{にち} 祇^ぎ堂^{だう}を^をり^りく^くけ^け 是^こを^をつ^つる^る天^{てん}の^の志^し
乃^{すなは}終^つり^り ○[○]幕^{まくら}分^{ぶん} 云^い條^{じょう}五^ご律^{りつ}奉^{ほう} 吉^{きち}田^{でん}雲^{うん}

比^ひ外^が國^{こく}の^の大^{だい}坐^ざ土^ど保^ほと^との^の多^た信^{しん}人^{にん}之^のれ^れと^とと^と
茲^{こゝ}就^す産^{さん}流^{りゅう}化^か智^ちを^をれ^れの^の只^{ただ}中^{ちゆう}信^{しん}の^のと^とと^と
所^{ところ}の^のと^と

江部系事記敘

皆貞享五年戊辰三月上澣雒陽書肆日新堂壽梓

日本歲時記敘

伊^い耆^{しよ}氏^し命^{めい}羲^ぎ和^わ欽^{きん}若^{じやく}界^{がい}天^{てん}曆^{りく}象^{しやう}日^{にち}月^{げつ}星^{せい}
辰^{ちん}敬^{けい}授^{じゆ}人^{にん}時^じ其^{その}欽^{きん}敬^{けい}如^{ごと}此^{ごと}其^{その}故^{ゆゑ}何^{なに}也^{なり}蓋^{たゞ}
聖^{せい}人^{にん}推^{おし}測^{そく}天^{てん}道^{だう}治^ち曆^{りく}明^{めい}時^じ是^{こゝ}事^{こと}天^{てん}治^ち民^{みん}
之^の事^{こと}而^{して}治^ち之^の法^{ぽう}也^{なり}天^{てん}下^か之^の吏^し莫^な先^ま於^か此^{こゝ}
莫^な大^{だい}於^か此^{こゝ}堯^{ぎやう}之^の初^{はつ}政^{せい}未^ま及^{じやく}他^た事^{こと}而^{して}先^ま之^の
者^{もの}良^よ有^あ以^よ也^{なり}振^{しん}古^こ以^よ來^{らい}言^{こと}曆^{りく}象^{しやう}者^{もの}世^よ有^あ
其^{その}人^{にん}屢^{しばしば}改^か寢^{しん}精^{せい}靡^み有^あ差^さ貸^か唯^{ただ}如^{ごと}授^{じゆ}時^じ勤^{きん}

民曆家之所未言也。如夏小正月令可謂庶幾乎。若夫玉燭靈典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助。然其所載不純粹者亦夥矣。可謂博而雜也。本邦自古未聞言歲時之明且詳者。故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者。居多。識者憾焉。竊謂教民授時在其位謀其政者之責。而非吾曹之所宜議。

然如民生日用雜細。更宜雖微。幾復可言。豈爲僭上乎。不佞夙有志于此。然衰朽之餘。齡亶艱考。索嘗屬家姪好古。命編錄於事之覈實。而便乎民用者。書之以和字。家姪頗聰慧。有編削之才。彼之攷古訂今。闕其疑。慎言其餘者。愜我之素志。書稿屢換。而輯錄已具。於是乎予暇日逐條再修補之。書遂成編矣。第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯魁秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



文政七甲甲年二月補刻

日本橋南壹丁目

江都

須原屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

大坂

秋田屋太右衛門

